

宮古・池間島のカツオ産業文化誌(4)

— 2つのぎょしょく「魚職」・「魚飾」による検討 —

若林 良和 (愛媛大学理事・副学長、南予水産研究センター教授)

1. はじめに

筆者は、社会学や民俗学、地理学、歴史学など多面的なアプローチで、つまり、学際的な視点で、池間島のカツオ産業文化を総合的に検討している。これまでに、筆者は、その研究成果として、本紀要に3報を公表した。まず、第1報(本紀要第23号:若林・川上(2019))では、筆者らは、池間島のカツオ産業(カツオ漁業と鰹節製造業)を地域漁業史の視点から整理することとし、宮古地域の史資料をもとにカツオ産業の年譜を作成した上で、池間島の近現代産業史にみられる特性を把握した。次に、第2報(本紀要第24号:若林・川上(2020))において、筆者らは、4事例(①鮫島幸兵衛とカツオ漁業、②カツオ産業の展開過程、③カツオ漁民の信仰、④カツオと島生活)から、「魚職」の史的展開を再構成して、池間島のカツオに関わる産業経済と生活文化の特性を明らかにした。さらに、第3報(本紀要第25号:若林・川上(2021))では、筆者らは、「魚飾」の史的展開を究明するために、カツオ産業に関する3事例(①コレラ流行の対策、②池前(池間)漁業組合、③「池間民族」と愛唱歌)、海難事故とカツオ漁民の心性に関する2事例(①カツオ漁船大本丸の遭難、②カツオ漁船雄山丸による中学生救助)から、池間島の村落組織や人間関係など伝統的な側面を検討した。

本稿は、その続編であり、第4報となる。池間島のカツオに関わる産業経済と生活文化を対象に、先行研究の成果をベースにして、「魚職」と「魚飾」という2つの「ぎょしょく」から再整理を行い、その地域や産業の特性を析出する

ことが本稿の目的である。具体的には、まず、7つの「ぎょしょく」、そして、「魚職」と「魚飾」の意味を改めて概括する。その上で、既存文献と生活記録をもとに、7事例(「魚職」分野で5事例:①カツオ産業技術の習得と鰹節販路の拡大、②国際的展開としての南方出漁、③明治末期のカツオ一本釣り漁法、④活餌の宝庫としてのヤビジ、⑤鰹節製造法の展開、「魚飾」分野で2事例:①カツオをめぐる信仰儀礼、②カツオに関わるカンニガイ)をトピック的に取り上げてカツオ産業文化を再検討することにした。¹⁾

2. 2つのぎょしょく「魚職」と「魚飾」の意味

筆者は2005(平成17)年に総合的な水産版食育「ぎょしょく教育」を提案した。これは食育基本法にもとづく食育推進と消費拡大のための魚食普及という2つの取組を統合したものと位置付けられる。²⁾

「ぎょしょく教育」のコンセプトは、①地域特性を念頭に置いたフードシステムの検討、②漁と食の再接近のための新たな検討、の2つを基盤としている。「ぎょしょく」と、ひらがな表記することで、単に「魚食」だけでなく、魚の生産(漁撈)から加工、流通、販売、消費、文化まで多義的な意味を持たせることができ、魚の諸事象をより精緻で体系的で、かつ、動的に把握できるのである。7つの「ぎょしょく」とは、①魚の調理実習や直接接触する「魚触」、②魚の種類や栄養等の魚本来の情報に関する「魚色」、魚の生産や流通の現場のうち、③漁

船漁業を知る「魚職」、④海面での養殖業に関する「魚殖」、⑤漁業者による植林活動など環境に関わる「魚植」、⑥伝統的な魚文化である「魚飾」、⑦地域で水揚げされた魚料理の試食という「魚食」である。よって、「ぎょしょく教育」は「魚触」から「魚飾」まで一連の流れをもとに「魚食」に到達する仕組みになっている。

「ぎょしょく教育」の実践により、地域では教育分野と産業分野で大きな効果が生まれる。まず、教育分野において、地域の教育力を止揚して多面的な教育が推進できる。「ぎょしょく教育」は、地域における教育力の止揚、地域における活性化の基盤につながる取り組みとして位置付けられる。したがって、これは地域の社会関係そのものを豊かにするとともに、「地域理解教育」として、地域水産業と地域社会を紡ぐことが可能となる。それから、産業分野については、多角的な水産振興の展開が期待できる。これは、地域の水産振興、地域活性化の基盤と位置付けられる。よって、「ぎょしょく教育」は水産振興のツールとして、地域の産業経済を止揚させることも可能である。³⁾

したがって、本稿では、7つの「ぎょしょく」のうち「魚職」と「魚飾」の視点から、池間島のカツオ産業文化を検討するが、これは、池間島そのものの理解の深化につながり、その活性化の推進を図っていく基盤となる可能性がある。

3. 「魚職」からみたカツオ

(1) カツオをめぐる地域間の交流

1) カツオに関する産業技術の習得と鯉節販路の拡大

池間島において、生業としてのカツオ漁撈以前、カツオは、フウヤガッチュ（鯉将）と呼ばれて「神の使い」と見なされたために、捕獲したり、食したりするのを控えられたことも

あった。

池間島のカツオ漁業であるが、『宮古郡八重山郡漁業調査書』（1914（大正4）年刊）によると、1906（明治39）年7月に鮫島幸兵衛は、カツオ漁船（帆掛けで艀漕ぎの和船）2隻を導入し、池間島を根拠地とし、狩俣沖での短時間操業が行われていた。これが宮古地域におけるカツオ漁業の嚆矢である。当時は、いわゆる、日帰り操業が原則で、カツオ漁船は大漁時に出港～漁撈～帰港～水揚げ～出港というプロセスを1日に2～3回ほど繰り返した。なお、鮫島は鹿児島県出身の寄留商人で、平良の西里商店街で雑貨店を経営していた。カツオ漁船を提供したのは平良の船匠（船大工で、漁船の補修や売買をしていた人物）の井上仙吉である。活餌の採捕で、池間島の伊良波捨市ら数名が雇用されたものの、操業や経営は宮崎県や鹿児島県の漁



写真1 池間漁港（遠景）

（提供：前里元長寿会）

業者が担った。⁴⁾

この点を是正すべく、池間島では、クミアイ（生産組合）が組織され、それをもとに稼働した山下丸や朝日丸では、各シンカ（漁船員）は来島した宮崎県の漁業者からカツオ一本釣り漁法の技術を学んだ。その後、池間島漁業者は宮崎県よりカツオ漁船4隻を買い取り、カツオ漁業に本格的に従事した。さらに、1909（明治42）

年には、自前のクミアイ直営方式が採用され、鮫島から漁龍丸(宮崎県の中古船)を購入してカツオ漁業は着手され、茅葺きの鰹節工場も建設されて稼働した。このクミアイは、法人組織の漁業組合ではなく、共同出資による生産組合のことであり、複数人が共同で出資し連帯で責任を持つ経営体である。その後、1910(明治43)年、沖縄県によって技術向上のために、カツオ一本釣り漁法の指導者(鹿児島県出身の山崎勝次)、鰹節製造法の指導者(高知県出身の西崎金助)がそれぞれ池間島に派遣された。こうして、池間島のカツオ漁業者と鰹節製造者は高いレベルの技術習得に励んだ。その結果、池間島のカツオ産業は宮古地域全体を牽引し、地域経済を支えることにつながったのである。

池間島の鰹節製造業であるが、宮古地域で最



写真2 池間漁港(周辺)

(提供:前里元長寿会)

初の鰹節製造は宮古本島の狩俣で行われた。カツオ漁業根拠地である池間島が宮古初の鰹節製造地にならなかった理由は、その製造に不可欠な薪と真水が十分でなかったことにある。池間島では、薪燃料の確保に限界があり、池間島の鰹節工場は狩俣や島尻からそれを買っていた。1909(明治42)年、池間島でカツオ漁船6隻が稼働するようになると、クミアイの鰹節工場も稼働し始めた。

大正期になると、仲間屋真は鰹節削り女工の

養成計画を策定し、池間島の子女への技術伝習に努めた。1912(大正元)年、仲間カナス、山城カメニガ、我那覇マツメガ、仲間カニメガの4人の女性は、鰹節削り技術を習得して本格的な鰹節製造に従事した。鰹節削り技術の指導者は高知県出身であったが、彼のロズさんだ歌が池間島で流行した。⁵⁾ 当時、池間の鰹節は週1回、沖縄本島へ出荷したが、その価格が大きく変動する状況にあった。

鰹節製造の技術向上のために、1927(昭和2)年から鰹節削り大会が開催され、池間島の女子青年団員も参加した。1930(昭和5)年に平良で開催された、第1回鰹節削り競技大会では、当時19歳の勝連節子は一等賞に輝いた。その後も、鰹節削り女工の技術がさらに向上し、池間島の鰹節製造は飛躍的に発展した

それに連動して、八重干瀬の20年間に及ぶ慣行的な専用漁業権、そして、池間漁業協同組合設立が、それぞれ沖縄県から認可された。宮古地域は、11隻のカツオ漁船が操業し、県下有数のカツオ産業地域へと発展したのである。

それ以降も、池間島漁業者は堅実に、かつ、不断の努力に努めた。1911(明治44)年には、宝山丸や重宝丸、山下丸の動力船3隻が導入されたものの、それを十分に扱える池間島漁業者は不在であった。それで、エンジン機関や機械の操作技術を習得するために、愛媛県から技術者が招かれたり、池間島漁業者が新潟県の池貝鉄工所へ派遣されたりした。当時の池間島の青年にとって、機関士となって油で滲んだ服を着ることも、操船することも、憧れであった。また、四国出身の中川米次は仲間越で1935(昭和10)年ごろまで機関修理工場を経営した。さらに、鰹節製造業では、愛媛県から鰹節削り女工が続々と来島し、その生産性は高まった。また、1915(大正4)年に、仲間屋真は松川利勇ともに大阪に出向いて鰹節の販路拡張に努めたの

である。

こうして、池間島のカツオ漁業者や鰹節製造者は、先取の精神をもとに、その後進性を克服するとともに、販路拡大に精励した。彼らは、熱心にカツオ一本釣り漁法と鰹節製造法の技術向上に努め、カツオ・鰹節生産に不可欠な餌料や燃料を確保する一方で、脆弱な資本力を補完すべく資金の共同化を図った。そして、カツオをめぐる産業技術の地域間交流がその礎となり、鰹節は上布や黒砂糖とともに、宮古の三大特産品として高い評価を得るようになったのである。

2) カツオをもとにした国際的な展開としての南方出漁

宮古地域における南方海域へ漁業進出は1927(昭和2)年からである。そして、池間島漁業者による最初の南方出漁は1929(昭和4)年であった。勝連敏夫や仲間貞栄、与那覇勝米、前泊徳正、新城増蔵、川上金四郎、新城金次郎の青年7人は活餌採捕の技術者として神戸経由でボルネオ島へ派遣された。この頃、鰹節の価格が下落したこともあり、宮古地域では、漁業をはじめ多業種での出稼ぎは大幅に増加した。そして、宝泉丸と久松丸のボルネオ島出漁が第1次南方カツオ基地漁業の端緒となった。

その後、池間島では、1931(昭和6)年に根剛丸は池間島民(釣手33人、女工4人)37人を



写真3 池間漁港の碑
(提供：川上哲也)

乗船させてトラック島へ、同様に、宝泉丸が池間島民46人を乗せてパラオ島へ、それぞれ出漁したのである。続いて、翌年の1932(昭和7)年には、幸安丸と弥栄丸は池間島漁業者72人を乗船させてポナペ島に出漁した。さらに、池間丸(19、27トンの新造船、焼玉50馬力)や宝泉丸、瑞光丸などはボルネオ島でカツオを漁獲し、女工も渡航して鰹節製造が行われた。その後も、南方出漁は継続的に進められ、1933(昭和8)年ごろには、これらの島々へ家族単位で移住するようになり、終戦時までカツオ産業が展開されたのである。

戦後、第2次南方カツオ基地漁業は沖縄本土復帰以前から行われた。1970(昭和45)年、池間島のカツオ漁船3隻は、伊良部島佐良浜のカツオ漁船2隻とともに、パラオとラバウルへ出漁した。さらに、1974(昭和49)年になると、ソロモン諸島、キャビアンなどパプアニューギニアへの出漁には船団が編成された。1976(昭和51)年の一隻当たりの水揚げは20トンを超えて大漁となった。そして、1978(昭和53)年の南方出漁した漁業者は宮古地域全体で700人に達した。このように、1970年代後半に南方カツオ出漁の最盛期を迎えたのである。カツオ漁獲の増大に連動して、南方基地での鰹節製造も推進された。1962(昭和37)年のリーダーは小禄治世と与儀定吉であった。

その一方で、池間島自体のカツオ漁業は衰退傾向をたどったが、6年ぶりに宝幸丸と宝山丸の新造カツオ漁船2隻が1981(昭和56)年に進水した。

1981(昭和56)年には、世界的な経済不況によって魚価が大幅な下落して低迷した結果、南方カツオ一本釣り漁業経営は厳しくなった。さらに、1982(昭和57)年には、パプアニューギニアの漁業基地が閉鎖され、池間島など宮古地域のカツオ漁業者は失業したのである。その救済

策の一環として、パヤオ（人工浮き魚礁）が設置されたものの、当初、池間島周辺の海域ではカツオの回遊も少なく、カツオ群は小規模であった。その後、1993（平成5）年に南方カツオ基地漁業が完全な撤退となった上、カツオ漁業創業100周年目に当たる2006（平成18）年に、産業としての操業はなくなったのである。

（2）明治末期のカツオ一本釣り漁法

池間島では、カツオはカッチュと呼ばれるが、その重量によって6つの別称があった。具体的には、ビリ（最下位の意味で、1.5 kg未満）、クバン（小盤1.5～3 kg）、チュウバン（中盤、3～7.2 kg）、ダイバン（大盤、7.2～9 kg、ナミダイ：並盤）、トビダイ（飛び大、飛び抜けて大きいの意味。9 kg以上）、トビトビダイ（飛び飛び大、超大物の意味。17 kg以上）である。カツオ一本釣り漁業が池間島で本格化した明治末期の操業実態を整理しておく。



写真4 池間島沖でのカツオ一本釣り

（提供：前里元長寿会）

当時のカツオ漁船は船長約12～14m、船幅約3mであり、1本の帆と八丁櫓が付いていた。カツオ漁船内にはイキマ（活間。活魚槽）がなく、活餌は桶に蓄えて活かして、柄杓で水の汲み替えをしていた。これは非効率であり、また、カツオ漁船員にとって重労働となった。当時のカツオ漁船員の配乗は、船頭、舵取役、漕ぎ手16人（トリカジとオモカジの両

舷ごとに4丁で計8丁、1丁につき2人）、ダンプル（樽桶）2人、垢（船底のあか）汲みと合計20人前後であった。

釣竿は青い唐竹が用いされた。⁶⁾ 船主から竹（唐竹）3本が支給されると、池間島漁業者は、釣り手として、自分の扱いやすいように、釣竿に創意工夫をして仕上げた。たとえば、池間島漁業者は、釣竿に弾力性を持たせるために、火であぶったり熱湯をかけたりして、しなり具合を調整した。さらに、竿頭に穴をあけて麻縄を通してつくった輪に麻の釣糸が結ばれ、釣竿の根元に木綿糸を巻き付けて滑り止めはつくられた。池間島漁業者は出航までに、カエシのない釣針を付けた釣竿、擬餌針を付けた釣竿、予備用の釣竿の3本を準備しておいた。

池間島の沿岸域には、活餌となる小魚が多く生息していた。たとえば、バカジャグ（ミナミキビナゴ）、ムギヤ（スカシテンジクダイ）、アカジャグ（キンメモドキ）、ミジヌ（ミズン）、などが群れで回遊しており、それらは活餌として採捕された。『宮古郡八重山郡漁業調査書』（1914（大正4）年刊）によれば、漁法は敷網を用いた追込みであった。カツオ漁船員は小魚を海中に敷いた網へ追い込んで捕獲し、タグ（餌すくい桶）に移した後、大桶や大樽に入れて漁場へ持って行った。活餌の酸欠防止対策として、大桶や大樽の海水を汲み出して入れ替える要員2名が配置されていた。その後、カツオ漁船内にイキマが付設されたことから、漁船員は活餌換水の重労働から解放されたわけである。

活餌を採捕した後、カツオ漁船はトリヤマ（鳥山。海鳥の群れ）を見つけるべく出航し、海鳥が乱舞している海面下には、カツオ群（フンミー）がいることが多かった。海鳥の姿を発見すれば、カツオ漁船はそこに急行した。⁷⁾

漁場に到着すると、池間島漁業者は、カイピラ（しゃもじ状の櫂）で海面も攪乱してしぼき

を上げて小魚が狂乱しているように見せかけ、カツオ群を漁船に引き寄せさせる一方、カエシのない釣針に活餌を掛け、釣獲態勢に入った。宮古地域では1918(大正7)年にカイビラが散水器へ変わったが、池間島に導入されたのは、その6年後の1924(大正13)年であった。これによって、漁撈時の労働負担が軽減された。カツオ群がカツオ漁船のほうへ来遊すれば、池間島漁業者(餌投げ)は、熟練の技で活餌をタイミング良く投げ入れて更に寄せ付けた。釣り上げられたカツオは池間島漁業者の脇に抱えられて釣針をはずされた。カツオの食い付きが良くなると、擬餌針の付いた釣針に切り替えられて釣獲は続けられたのである。

(3) 活餌の宝庫としてのヤビジ

八重干瀬は池間島の北方約16kmに位置し、周囲約25km²の大規模なサンゴ礁群の総称である。前述したように、カツオ一本釣り漁業の生命線と言える活餌の宝庫がヤビジであった。⁸⁾ 八重干瀬という名前は、ッシ(干瀬)が七重八重と重なり合って巨大なサンゴ礁群を形成していることに由来する。また、八重干瀬の呼称は、ヤエビシ、ヤエビセ、ヤエピシなど多々あり、1999(平成11)年にヤビジと統一された。ヤビジにあるッシの数は105に達し、そのなかで、



写真5 活餌搭載を終え出航するカツオ漁船
(提供：前里元長寿会)

干瀬の名称には、最短であるドウ(銅)から、最長のサグナ・ナガビジヌ・ハイバラヌ・フタクウアイ・ッシガマ(ホラガイ干瀬南の2つ並ぶ干瀬)までが存在する。

戦前における活餌採捕の状況はすでに略述したので、ここでは、戦後の実態について整理しておきたい。1950(昭和25)年代の池間島では、20~30トン型の木造カツオ漁船14隻が稼働し、各船には30~40人の漁船員が乗船した。活餌の主たる漁場はヤビジであり、その資源量が無尽蔵とされた。池間島漁業者は、ジャグガニ・ダキ(活餌捕りの竹。直径2cmで長さ2mの竹)を手に持ち、20m間隔で海へ飛び込んで、連携しながら活餌を網へ追い込んだ。彼らは追い込んだ活餌をウーキ(桶)ですくい取って生簀に入れた。この一連の作業は池間島漁業者にとって極めて重労働であった。特に、台風前や大潮時で潮流が激しい場合に、この作業は困難なものとなった。それで、活餌が一定、充足されると、カツオ漁船は漁場へ向かった。さらに、17トン型のFRPカツオ漁船が主流になった1980(昭和55)年ごろのヤビジでは、ウツ・ヌ・タカウリ(最北端で干潮時に干瀬)やタナカ・ヌ・ミジユキ(干潮時でも水深5m)の周辺海域が活餌の好漁場であった。そこでは、池間島漁業者が巨大なサバ(サメ)とスウダク(エイ)に遭遇することもあったようだ。

(4) 鯉節製造法の展開

鯉節製造にはナマギリ(生切り)~シャジュク(煮熟)~骨抜き~焙乾~削り~カビ付け~日乾という一連の工程がある。鯉節工場に従事する男性がダンコウ(男工)、その女性はジョコウ(女工)と呼ばれた。

ナマギリ(生切り)において、クバン(3kg)以下のカツオが3枚おろしの半身分と2つの節、チュウバン(3kg)以上のものは半身をさ



写真6 鰹節製造（生切り）
（提供：前里元長寿会）

らに背と腹の4つの節に分けた。鰹節のサイズには、小節、中節、並大節、飛節などがあつた。また、製造段階による製品から、煮熟までのものをナマリブシ（生利節）、直下火式で焙乾までのものをアラブシ（荒節）、削りを終えたものをケズリブシ（削り節）、日乾し熟成させたものをホンブシ（本節）と、それぞれの呼称がある。なお、セビキやキズィ、マガリなど7種類の削り用小刀が工場責任者や男工によって製作され、女工はこれらを仕事道具として生涯の宝とした。

当時、鰹節削り女工さんにとって、本節を削って食することは皆無であり、削り取った鰹節のブキ（表皮）を食べるくらいであつた。これは何日間も天日干しを行なってミンガミ（南蛮甕）



写真7 鰹節製造（骨抜き）
（提供：前里元長寿会）

に保存して冬季に食した。ブキは、タティジル（たて汁）ヤンナンッスー（具なし汁）、スウーヌジャズ（料理のだし）、油味噌などに用いられて、各家庭でも重宝されていた。

宮古地域を含む沖縄県の鰹節製造法は、当初、日向型（宮崎県）であつたが、大阪の市場で土佐型（高知県）の価格が上昇したことから、土佐型に変更された。さらに、沖縄県は焙乾の温度を考慮して焼津型（静岡県）を奨励したこともあつて、その後、焼津型が定着したのである。

戦後、1959（昭和34）年には、1船あたりカツオの水揚げが40万斤（240トン）に達して前代未聞の大漁となり、カツオの処理が間に合わず、畑の肥料になることもあつた。ただ、翌年のカツオ漁業は不漁となり、鰹節の価格が暴騰した。1961（昭和36）年の池間島における鰹節工場は9か所になった。

4. 「魚節」からみたカツオ

（1）カツオをめぐる信仰儀礼

1）カツオ漁船の縁起かつぎ

カツオ漁船員（インシャ。海人）は、極めて繊細に縁起をかついだ。以前は、女性のカツオ漁船乗船が許されず、家庭で出産がある場合、その夫や父親にあたる漁船員は3日間、休漁した。また、漁船員は、包丁などの金物を海中へ落としたら、漁運を回復するために、カンニガイ（神への祈願）をした。

カツオ漁業の開始時には、ハズミニガイ（始めの祈願）が行われ、その後、カツオの不漁が続くと、再度のカンニガイを求める池間島漁業者は多かつた。ニガインマ（司女・巫女）は池間港の南側正面にあるナナムイ（オハルズ御嶽にある池間七社）へ出向いて大漁になるように祈願した。ナナムイは、池間島の聖域の一つであり、池間島の守護神、航海安全や豊漁豊作の神として崇められている。その神座には、100を



写真8 ナナムイのスナカオル群
(提供：前里元長寿会)

超えるスナカオル（砂香炉）が並び、そのなかにサメシマカオル（鮫島の香炉）もある。カツオが不漁になると、ニガインマはそこに線香を立てて大漁の祈願をした。⁹⁾

2) 出港時～釣獲時～帰港時の儀礼

出港にあたり、カツオ漁船の船長や漁船員によって、大漁や航海安全の祈願が行われた。船長は、酒と茶をフナダマ（船霊）に供えて、各漁船員に対して盃を差し出した。それを船長から受け取った漁船員たちは順に「大漁」や「航海安全」などと唱えながら酒を口にした。その後、船長はオモテ（船首）や機関室も酒で淨めた。カツオ漁船が離岸すると、船長は、港の神に一礼した後、ナナムイに頭を深く下げた。その間、他の漁船員たちも手を合わせて祈願したのである。

出漁後、最初のトゥイマツンミ（鳥山）で釣獲したカツオは、釣果への感謝を込めてブリッジ（操舵室）のフナダマ（船霊様）に供えられた。次に、カツオの頭が切り落とされて、ウドゥルツガマ（心臓）は取り出された。そして、背びれを剥ぎ、その両端の5cmほど2片が切られた。さらに、3枚おろしで四つ割にした雄節の中央と雌節の両端から2切れずつの計4片が切り取られた。それで、カツオの心臓1つと切り

身6片は椀に盛られて神供されたのである。

帰港時に、船長は、池間島の沖合3kmにあるイラビジ（伊良干瀬）の神、池間島伝いにある大和神、トウヌガナシ（殿加那志）の神に対して、釣果への感謝を込めて一礼した。そして、帰港前に船長はナナムイに向かって、今回の漁の御礼と報告、次の航海安全と大漁を祈願した。大漁旗を掲げての帰港に際して、2匹のカツオが腹合わせにして敷物の上に並べられた。これらはトウヌガナシとナナムイの神々に対して、洋上から漁の感謝をするために供えられたものである。

(2) カツオに関わるカンニガイ

1) クミアイ（組合）単位のカンニガイ

クミアイを単位に、カンニガイが行われた。カツオ漁船の各船はクミアイ・ニガインマ（組合の司女・巫女）を擁し、様々なクミアイニガイ（組合による御願）を依頼した。たとえば、ハズミ（操業開始）、マビトウ（健康）、ウフユダミ（大漁）、カリユシダミ（海上安全）、キカイダミ（機械安全）、リュウグウ（竜宮）、オワリ（漁期終了）、シンドウ（船長）、ウヤカタ（船主）、ポーソン（水夫長）、キカンシャ（機関長）、カイケイ（会計）、ミガニミービヤ（メガネ、カツオ群の監視者）などのカンニガイのほか、魚寄せや餌寄せのカンニガイもあった。家族としても、カツオ漁船という生産単位としても、ニガインマを通して地域の神々に大漁や航海安全など一連の思いが託されたのである。

2) カツオ漁船のニガインマ

カツオ漁船には、前述のとおり、それぞれニガインマがいたが、その様態をまとめておきたい。¹⁰⁾ 南方カツオ漁業が盛んであった1970（昭和45）年代には、平良港を出港して現地に到着するまでの間、ニガインマは航海中の船主



写真9 ニガインマによるカンニガイ
(提供：前里元長寿会)

宅で毎夕、カンナーギ・タビハイヌ・アーク(神を崇めた旅栄えの歌) 1番から49番まで繰り返し唄い続けて祈願した。その歌意を略述すると、それは「航海中の安全を祈り、兄弟らの航海の無事を願うものであり、神を尊び、神を崇めて、諸々の神、12方神を崇拝し、和やかな風のもと、静かな海上の旅ができ、晴天のなかに平穏無事な航海で帰港できることを願う」という内容であった。

様々な祈願に際して、身を浄めて長髪を結って簪を刺したニガインマは、米粒を用いた糊を付けた張りのある着物を羽織った。ニガインマは仏壇の前に筵を敷き、米や塩、酒、スキジュウ(イカ)、たばこ、カミガマ(お神酒の入った小さな壺)を2つの膳に整然と並べた。その後、両手でないと握りきれないほどの線香の束を香炉に立てかけた。こうした一連の準備は丁寧に行われ、30分近くを要した。ニガインマは、神前に向かうと、1本のたばこをふかして手を合わせて、海上安全と大漁のためにフツユンシ(祈り唱え)、線香の火がスクウ(束ねた帯)に届くまでの約30分以上にわたり唱え続けたのである。この光景には神との語らいを醸し出し、その唱えごとには一語ずつリズムがあって神秘的なものであった。

5. おわりに

本稿は、カツオ産業(カツオ漁業と鰹節製造業)の展開過程に注目して、「魚職」と「魚飾」の観点から、既存の先行文献や生活記録をもとに、池間島のカツオに関わる産業経済と生活文化の特性について検討した。

その総括に入る前に、1960(昭和35)年ごろの「カツオの島・池間島」の漁村風景を素描しておきたい。当時、池間島のカツオ漁船は14隻に達し、その漁船員448名のうちの池間島出身者341が数え、戦後に最も隆盛を誇った。¹¹⁾ 自然を利用した池間漁港(仲間越)には、サバニ(くり舟)が出入りし、朝夕、カツオに関わる人たちの活気で大いに賑わった。防波堤も備えた池間漁港には鰹節工場のほか、肥料や鉄工、ボタンなどの工場も立ち並んでいた。春から秋までの間、夕方になると、池間島のカツオ漁船14隻全船は池間漁港に威風堂々とひしめきあい、競って水揚げを行った。それに呼応して、カツオ処理のために、池間島の人たちは慌ただしく往来した。さらに、夏場には、昼夜をたがわず、池間漁港の界限では、鰹節製造に係る独特の匂いが充満していた。こうした華やいで活気に満ちた光景は、池間行進曲で「北の浜辺を見下ろせば 此处ぞ名に負う仲間越 納屋の煙突空をつき 工場の機械は威勢良し」と明解に



写真10 池間行進曲の歌碑
(提供：川上哲也)

描かれている。¹²⁾ 当時の子どもたちは海や浜辺を遊び場として、魚釣りをしたり泳いだり、魚突きの道具づくりをしたりした。夏場になると、子供たちは、鯉節工場でのカツオ解体に目を凝らし、カツオの頭をもらう機会をねらっていた。それを手に入れた子どもらは海へ投げ込んでカツオの頭の争奪戦に及んだ。一人の子どもがウドゥルツガマ（心臓）をもぎ取って口へ放り込むと、さらに、他の子どもたちはカツオの目玉や皮、残った身をむさぼるように平らげた。これは、当時の食料事情からすると、空腹を満たすもので、現在のおやつに相当し、そのカツオの味は格別であったという。こうした風景から、豊穡な海の恵みとしてのカツオ、池間島漁業者のたくましさ、子供たちの生きる力の原点が垣間見られたわけである。

では、こうしたカツオ漁村風景の現出を可能にした基盤について、「魚職」と「魚飾」の観点から得られた暫定的な総括としては、次の7点が整理できる。

まず、「魚職」の観点として、5点が指摘できる。

①カツオに関わる産業技術の習得と鯉節販路の拡大に注目すると、池間島のカツオ産業関係者は、地域間の産業交流をもとに、技術面と経営面における後進性を不断の努力で克服するとともに、販路拡大に精励した。彼らのたゆまぬ取組のもとに、カツオ産業は飛躍的な成長を遂げ、サトウキビ産業、宮古上布製紡業とともに、宮古の三大産業として地域経済を潤してきたのである。

②国際的な展開としての南方出漁から、池間島漁業者らは、経済情勢の変動に伴う鯉節の価格低下の影響を受けて、海外出漁を余儀なくされたのである。彼らは、池間島周辺海域での操業実績を踏まえ、戦前から戦後までの2度にわたり国際的な地域間交流や技術協力のパイオニ

ア的な存在として、果敢に南方海域へ出漁した。まず、戦前の第1次南方カツオ基地漁業はボルネオやトラック、パラオ、ポナペなどで組み込まれ、終戦とともに終了した。次に、戦後の第2次南方カツオ基地漁業も、パラオやソロモン諸島、ラバウルなどパプアニューギニアなどへ出漁したが、世界的な経済不況により撤退に至ったわけである。

③明治末期のカツオ漁撈実態に着目すると、池間島のカツオ漁撈はその習性を把握した上で、技術上の様々な思慮が行われてきた。カツオ一本釣り漁法は、まさに、カツオ生産技術の知恵が集積されたものと言え、機械化によって労働負担減などの合理化が図られたのである。

④活餌の宝庫とされたヤビジから明らかになったのは、池間島漁業者がヤビジの詳細を的確に観察し、得られた知識を精緻に把握して活餌を採捕していたことである。彼らは、卓越した知見と豊富な経験をもとに「生きる術」を体得し、生業・自給的な「漁撈」、さらには、産業・営利的な「漁業」を成立させてきたわけである。

⑤鯉節製造法の展開については、池間島の鯉節製造は先進地域である日本本土の技術習得を積極的に推進し、その技術の向上が図られてきた。そして、池間島の鯉節製造は、国内外のカツオ漁獲や世界経済の動向に直接的な影響を受けるなかで、様々な創意工夫を施して展開されてきたのである。

次に、「魚飾」の観点から、次の2点が指摘できよう。

①カツオをめぐる信仰儀礼に注目すると、池間島漁業者は、自然、とりわけ、海に対する感謝と敬意をもとに共存共栄を前提にしながら、大漁と海上安全に関わる願いを行なってきたことが裏付けられた。

②カツオをめぐるカンニガイからは、カツオ

産業の発展によって池間島の経済的な成長や生活水準の向上が進行するなかで、そうした背景には様々なカンニガイという大きな存在があった。そして、カツオを中心とした祭祀は、池間島漁業者の生活の軸となり、また、生産活動の原動力にもつながっているといえよう。

以上のことから、池間島では、カツオ産業が短期間で成長し、宮古地域の他島に追従を許さない優位性がみられた結果、経済力の蓄積と地域力の涵養が明白なものになったのである。

今回の検討は池間島のカツオ産業文化に関して点描的なものにとどまるが、筆者としては、今後も池間島におけるカツオの産業経済と生活文化を分析していく予定である。筆者は更なるフィールドワークの実践や文献研究をもとに学際的に検討し、その研究成果を本紀要などで公表していきたい。

注

- 1) 本稿作成にあたって、筆者は、これまでの共同執筆者であった川上哲也氏から各種資料の提供を受け、それらの資料をもとに当初から提示している研究の目的や主旨にしたがって包括的に整理して記述した。なお、本稿は平良(2002)、伊計・上里・吉浜・本村(2005)、川上(2007)、伊良波(2013)、2012 カツオフォーラム in 宮古島実行委員会(2013)などの研究成果に依拠していることを予め、断っておきたい。
- 2) 7つの「ぎょしょく」に関する詳細な内容と実質的な効果については、若林(2018)を参照されたい。
- 3) 「ぎょしょく教育」の実践と展開は、新聞や雑誌、テレビ、ラジオなど多くのメディアで報道されてきた。また、これは『水産白書』で2度にわたり紹介された上、「地域に根ざした食育コンクール」の優秀賞受賞、さらに、大日本水産会の魚食普及表彰など社会的に高い評価を得た。
- 4) 伊良波拾市は、その後、1910(明治43)年にクミアイのシンドウ(船頭)になった。
- 5) 川上メガ(1910~1998、川上哲也氏の母)によると、「木の葉のような池間じゃけれど好きな女がいるからね好きな高知県も嫌になりいやな池間が好きになるここに百万円のお金があれば沖縄の鰹節を買い集め好きな女に削らせておそばで見物してみたい」という詞であったという。
- 6) 唐竹は大名竹とも呼ばれ、宮古本島から仕入れた。池間の釣竿が唐竹から孟宗竹になったのは戦後であり、それが鹿児島県から送られてきた。
- 7) 魚群探知機の使用は戦後の典型的な技術発展の例といえる。池間島では、初音丸船主の上里清太郎が1961(昭和36)年に初めて魚群探知機を導入した。
- 8) この点は、川上哲也「唐獅子 ヤビジはカツオ漁の秘境」『沖縄タイムス』2019(令和元)年4月17日刊をもとにして全面的に書き改めた。
- 9) サメシマカオルは池間島のカツオ漁業の生みの親ともいうべき鮫島幸兵衛を祀っているとされる。
- 10) この部分は、川上哲也「唐獅子 神をあがめる池間島」『沖縄タイムス』2019(令和元)年4月3日刊をもとにして全面的に書き改めた。
- 11) この箇所は、川上哲也「唐獅子 我は海の子「カツオ少年」」『沖縄タイムス』2019(令和元)年5月15日刊をもとにして全面的に書き改めた。
- 12) 池間行進曲は、1925(大正14)年から1927(昭和2)年に池間尋常高等小学校へ赴任した池間昌増が作詞した。池間島の人々の心の

歌とされ、80年あまりにわたって歌い継がれている。その歌碑が池間漁港の通称「カツオ公園」にある。

参考文献

池間小学校(1963)『池間小学校60周年記念誌』私家版(ガリ版)

伊良波盛男(2011)『わが池間島』池間郷土学研究所

伊良波彌(2013)『池間島からの視点～マーケット・カツオ漁業を中心に～』だしきや企画

上里武・本村満(2005)『島に生きて～奇跡をみた男たち～』私家版

大井浩太郎(1984)『池間嶋史誌』南西印刷

加藤久子(1987)「池間島の漁業と離島苦の女性労働」『地域と文化』第45号

笠原政治(2008)『池間民族考』風響社

川上哲也(1989)『仲原壮一郎と池間島』私家版

川上哲也(1997)『おかあ』私家版

川上哲也(2001)『んすむら』私家版

川上哲也(2007)『カツオ万歳』沖縄自分史センター

川島秀一(2005)『カツオ漁』法政大学出版局

久貝克博(1998)『宮古回帰』印刷センターよなみね

砂川玄德(1999)『宮古島人間風土記～終戦から復帰まで～』サン印刷

砂川玄德(2002)『続・宮古島人間風土記』比嘉興文堂

平良新弘(2002)『海人の島』印刷センターよなみね

仲宗根将二(1988)『宮古風土記』ひるぎ社

仲間井佐六(2000)『伊良部町漁業史～パヤオ発祥の地～』佐良浜印刷

仲間明典(2012)『佐良浜漁師達の南方鯉魚の軌跡』地域おこし研究社

2012 カツオフォーラム in 宮古島実行委員会(2013)『2012 カツオフォーラム in 宮古島 報告書』2012 カツオフォーラム in 宮古島委員会

南山舎(2009)『月刊やいま』No.187(2009年1/2合併号)南山舎

森田真弘(1961)『仲間屋真小伝～池間漁業略史～』内外水産研究所

野口武徳(1972)『沖縄池間島民俗誌』未来社

前泊徳正(1975)『前泊徳正ノート』私家版

若林良和(1991)『カツオ一本釣り』中央公論社(中公新書1021)

若林良和(2008)『ぎょしょく教育 愛媛県愛南町発水産版食育の実践と提言』筑波書房

若林良和・川上哲也(2019)「宮古・池間島のカツオ産業文化誌(1)ー近現代における池間島カツオ産業史の整理と検討ー」『宮古島市総合博物館紀要23』

若林良和・川上哲也(2020)「宮古・池間島のカツオ産業文化誌(2)ーぎょしょく「魚職」からみた生活世界ー」『宮古島市総合博物館紀要24』

若林良和・川上哲也(2021)「宮古・池間島のカツオ産業文化誌(3)ーぎょしょく「魚飾」からみた島の村落組織と人間関係ー」『宮古島市総合博物館紀要25』

付記

本稿は、2018～2022(平成30～令和4)年度科学研究費補助金「カツオを題材とした水産版食育の実践的研究ー「ぎょしょく」の体系化とツール開発ー」(基盤研究(C) 課題番号:18K01996 研究代表者:若林良和)を活用した成果である。